

## 第13回・第3期第2回宝塚市協働のまちづくり促進委員会

### 協働の仕組みづくり検討部会 会議録

開催日時	平成30年1月25日(木) 18:30~21:00
開催場所	宝塚市役所3階 特別会議室
次第	1 開会 2 企画経営部からの依頼事項 (1) 第6次総合計画検討懇話会(案)について 3 議事 (1) まちづくり計画見直しガイドライン作成について 4 その他 5 閉会
出席委員	久委員長、飯室委員、中山委員、光村委員、平石委員、古村委員、立花委員、野田委員、加藤委員、藤本委員、喜多委員、溝口委員、足立委員、成瀬委員、
開催形態	公開(傍聴人1)、関西総合研究所3人、OM環境計画研究所2人

#### 1 開会

第13回・第3期第2回宝塚協働のまちづくり促進委員会、協働の仕組みづくり検討部会の開会。

事務局から、本日の出席者は14人、欠席者は4人であること、宝塚市協働のまちづくり促進委員会規則第5条第2項に規定する過半数の出席要件を満たしているため、会議が成立していること、及び傍聴希望者は1人であることを報告した。

#### 2 企画経営部からの依頼事項

##### (1) 第6次総合計画検討懇話会(案)について

企画経営部室長、政策推進課長から、平成33年からの第6次宝塚市総合計画検討懇話会(案)について資料に基づき説明があった。

- ・来年度から第6次宝塚市総合計画の策定をスタートする。平成32年7月に市民、議会にお示しできるように進める。
- ・計画期間や計画の体系・構成、策定体制や策定スキーム、計画策定の基本姿勢、プロセスや視点などの方針を決めてから着手したい。
- ・方針を決めるにあたって、検討懇話会を設置して検討を進めたい。委員として、促進委員会から2名の参加をお願いしたいと考えている。

会長) 人選は事務局に一任する。

### 3 議事

#### (1) まちづくり計画見直しのガイドライン作成について

冒頭に、委員から、「まちづくり計画ガイドライン議論のたたき台」資料に沿って説明。

- ・そもそも、まちづくり協議会は平成14年、正司市長の時代に、顔の見えるコミュニティの範囲ということからおおむね小学校区単位で組織された。
- ・総合計画との関係を振り返ると、第4次総計まで、まちづくり計画は「行政の計画」として位置づけられており、「協働のまちづくり計画」は総計の別冊としてまとめられていた。しかしながら、第5次総計は、まちづくり計画には触れておらず、「市民の取り組み」とされ、市民と行政の計画という区切りができた。
- ・平成20年と25年にまちづくり計画の見直しが行われている。達成度はそれぞれ36%と45%であった。
- ・ガイドラインの内容は、おおむね前回のガイドラインに沿って、達成度をさらに高めるような情報を盛り込んでどうか。
- ・前文、本文の項目について、ならびに、ガイドライン作成と並行して、行政として、住民として検討が必要な項目や、促進委員会の課題、必要な資料などが提案された。

ア【会長】前回のガイドラインは16年前に作ったものなので、従来型の印象がある。委員会を作って広く意見を聞くやり方は書かれているが、白紙からみんなで作り上げていくボトムアップ型のワークショップ形式などが記載されていない。みんなで作り上げていく方法の例示をしていただきたい。大枠は変わらないが、ディテールは再考してリニューアルした方がよいだろう。

大阪市東淀川区の西部地区のまちづくり構想づくりでは、7地区の会長にも出てもらい協議会を結成し、ここで計画をオーソライズしている。30代から50代を中心に部会をつくり、ワークショップで計画をたたいていっており、それぞれの地域の人たちの意見も聞いて、まとめていこうとしている。地域活動協議会の推薦で若手メンバーが選出されているが、各地域活動協議会にどのようにフィードバックさせるかで、うまくいっているところと苦戦しているところがある。うまく地域の声を聞いているところは、ワークショップを繰り返し行えている。子育て層の意見を聞いている。一方、地域の役員会で意見を聞くことで精一杯というところもある。地域でアンケートを実施しているところもある。それ協議会によって違う。地域でどこまでやれるかは、地域ごとに違い、バリエーションがある。見直し方は多様なバリエーションをイメージできるようにガイドラインに書き込んでいただきたい。

イ なぜ計画が進まなかったのか。反省会をすべきではないか。計画づくりに関わった人に聞いてみて、そうかとわかることがあった。いい計画ができて、3割くらいはそのままいく。大きな項目はメンバーが「市がやること」と認識して取り組む気持ちになっていない。なぜそうなるのか。それは、行政と住民のやりとりがなく、やる気にならなかったことが問題だろう。フェイストゥフェイスで一緒にやっているとやる気にならない。できたところは、なぜうまくいったのか知りたいし、学ばないといけない。

ウ ガイドラインの3ページには、地域で意見を聞く方法として、ホームページや掲示板、集まり、口コミなどを紹介している。これらをもっとふくらませて書かないといけない。しっかり住民の声を聞いて作った計画だったと評価して良い部分はある。ゼロから作る

のではなく、現行計画をベースに見直していくのがよい。

- エ 達成できていない部分は、なぜ取り組んでいないのか、そこに切り込む必要がある。
- オ ゼロからではない。現行計画をベースにして、なぜこの計画を作ったのかを論議して、以前から変わっているところを考えていけばよい。どういう意見を集めるのか。話し合う仕組みを議論したい。
- カ 計画が地域に浸透していないところもある。スタートラインは今の計画をレビューすること。行政、市民、両者に問題があった。両者がチェックしてお互いが共有するところからスタートしたい。次にワークショップなどの手法も説明する。ワークショップが機能するのは、ファシリテーターがうまくやれる場合である。ファシリテーター次第で、議論を整理できない。
- キ【会長】やりっぱなしのワークショップが増えている。グループワークをしているだけでワークショップと言っていたりする。まとめる、意見を出すなどワークショップといっても目的によって進め方も違う。ワークショップ形式で計画をまとめるのは無理である。ワークショップで出した意見を計画にしていくには委員会が必要である。ワークショップは意見をみんなで出し合う場で、全体の中でどう組み上げていくかを考えるのが委員会。ガイドラインにそこも書いていただきたい。
- アンケートとワークショップは違う意味がある。数十人の前向きな人がいたらワークショップができるが、広く簡便に意見を集めるにはアンケートが有効。ワークショップは繰り返し対話するので意見が変わることもあるが、アンケートはその時点の声。それぞれ特徴、問題点がある。
- ク 36%達成というのは、まち協に伝わっているのか。
- ケ 市民がやることは進んでいるが、協働でやること、行政がやることは詰めができずに残った印象。市民がやることが多い計画は達成率が高いはず。
- コ 平成22年の見直しで、市はフローチャートを示してチェックさせた。計画の項目を残すか捨てるかの議論もした。市も把握しているはず。しかし、それが5次総計に反映されなかった。住民も自治会かまち協かという話になり、取り組まなかった。
- サ 仕組みを作ったのに、そうならなかったのはなぜか。ヒアリングすべきだろう。
- シ ガイドラインと並行してやるべきだ。
- ス【会長】どの内容が進捗率が高いか低いかはわかるだろう。科学的に分析するといろいろなことがわかるだろう。それをもとに、どう作れば行政が動けるか、どう作れば実現するか見えてくる。ただし、地域担当はフェイストゥフェイスで議論をしてもすぐに受け答えできない。どういう仕掛けにするかは行政側の課題。福岡市の事例で、まち協で計画も作っていた。協働課長が元土木担当の経験があり、住民に「聞いておきます」というと期待を持つから「できない」と言える人がいいという話をしてきた。一旦地域の声を聞き、市に持ち帰ってもんでから返す。それを繰り返すことで行政の意図が入った計画になる。一旦持ち帰る、キャッチボールできる次善策を作ること。
- セ お願いしてダメなら、ダメだろう。行政も住民も、変わる必要はある。できないものを、どうしていくのかを市民も考えないといけない。
- ソ【会長】豊中市のまちづくり構想に関わった。住民版と行政版がある。「できません」ではなく、なぜできないか、地域がどうすれば実現できるかを伝えている。たとえば、住民合意があれば道路を拡幅できる、など。

- タ 中山台では相互にやっていた。まちづくり部会に、市からも来てもらっていた。平成18年から20年、地域創造会議をブロックごとに開催していたが、これも平成22年になくなった。4次総計の途中までは続いていたが、5次総計でやめたのはなぜか。また、「充実させる」といった理念的な計画は外すべきで、内容も整理する。こうした項目が入っていることは、達成率を下げる理由になっていると思われる。
- チ 具体的なゴールを書かないとダメである。どうしてうまくいかなかったのか、逆になぜ進んだのかを調べてほしい。
- ツ【市】現計画は現会長ですら存在を知らない。地域の中で継承されていないので、回答できないのではないかな。
- テ【会長】自分たちの計画になっていない。まちづくり計画って何か。いろいろな活動を柱のもとに進めていくためのもので、自主的に必要なもの、体系的に活動をみていくものであろう。
- ト 取り組みなくても地域は悪びれていない。行政がやることだと思っている。
- ナ ワークショップのことを強く書いた方が良いと思う。まちづくり計画は市民が主体に作るものであるが、今はまち協にいろいろな人が関わっていないことが課題。いろいろな人から話を聞くことが大事。現行ガイドラインは意見を聞くことを重点的に書いて、後の運営にも使えるものになっていなかった。まちづくり計画ができて、まちづくり計画をどう回していくか、ガイドラインにそこが書かれて、マニュアル的になればよいと思う。ホワイトボードに書くというだけでも誰でもファシリテーターはできる。ファシリテーターを育てるということがガイドラインに書かれてもよい。まちをみんなで運営していけるようになればよい。
- ニ ファシリテーターが鍵だろう。気配りができる人が必要である。
- ヌ【会長】ファシリテーターはプロに入ってもらわないようにしていただきたい。地域の中にできる人を見つけていく。ワークショップをする中で養成してほしい。千葉県柏市は包括ケアシステムの最先端のまち。顔が見える関係づくり会議をやっている。医師、看護師、歯科医師、薬剤師等が関わっている。グループワークをしているうちに、ファシリテーターがうまくできる人を見つけていき、その人が地域のコーディネートをするやり方。自主的にファシリテーター研修会もやり始めている。宝塚NPOセンターで研修を実施いただくのもよい。
- ネ とるべきアクションのリストアップをしてはどうか。
- ノ【会長】今のこの会議がワークショップ。事務局が次回までに整理してくれる。
- ハ 住民が作る計画。住民が実行する計画。行政はサポートする役割。それを前段で強調する。行政にやってくれと投げ返すのではないという視点を持つ必要があるから、「行政がやること」は削除してはどうか。いろいろなまち協があっても一律で計画をつくりたいが、この委員会では20地区の現場をわからないままガイドラインを作ろうしている怖さはある。3月中にガイドラインをつくる予定であるが、どうするのか。ワーキングチームを作るのか。
- ヒ 行政がやることを外すと、何のための計画か。市民でやるべきことと行政がやることがある。危険を減らす、構造を変えるなど行政がやることもあるはず。おまかせでなく提案もいる。行政だけでなく、市民の意見で一緒にやるということではないか。
- フ【会長】池田市は特色あるやり方をしている。予算提案制度があり、地域ごとに1000万

円が割り当てられている。行政予算の幅に組み込む。財布の限度がわかると住民も優先順位をつけることができる。地域が選べる仕組み。

近畿大学にも似たようなルールがある。プロジェクターを買いたい時に、管理予算は限度があるので待たないと買えないが、学部予算で買うなら自由に使える。待つて全体予算を使うのか、すぐに自前予算で買うのかの選択になる。

へ ガイドラインは絶対守ってほしい事項を書く。ガチガチにせず、ゆるやかな方が良い。

ホ 今の計画も20地区それぞれ表記が違う。ガイドライン通りにはなっていない。あまりゆるめると、レビューできないので、ある程度の基準はあるだろう。

マ 委員からのご提案は、今のガイドラインでよいので、内容やメニューを重点的に、例示や解説を加えていくのがよいということ。

ミ 地域はみんなそれぞれ違う。とらえ方も違うし、人も違う。市には見に来てほしい。担当課に来てもらえるのか。ガイドラインに沿ってやっていけるところもあれば、なんとか活動しているというところもある。

ム 障がい者にとって安全なまちづくりを考える中で、避難の時に大きな車椅子でエレベーターも乗りづらいが、工夫すれば解決することがわかった。多くの人の声が集まるとよい。20年前と状況が変わっているなので、違った視点でみると、良いものができると思う。

メ【会長】ワークショップのときに、当事者の方にも参加してもらおう。当事者グループに入っていって意見を求めるなどの例示ができるとうい。

モ 作り方をどうするか。統計や行政の予定も見えた方が良いが、そうも言っていられない。走りながらやるしかないなので、歩調をあわせながら作っていく。あとは各まち協に悩んでもらう。宮崎市では所得税の1%をまち協に使うことになっていて、予算が保証されているそうである。

ヤ ワorkshopもいろいろなやり方がある。もう少し突っ込んで書いてはどうか。行政が計画づくりに入る。方向性が見えることを出す。キャッチボールして実効性を高めていく。

ユ【会長】20の計画がすべて理想型になることはないだろう。その温度差を認識すること。理想の計画を作れない地域にも、できる人はいるはず。この機会に多くの人に関わってもらえるようにできればよい。本当に当事者に聞いた計画になっているか。子育てのことを子育て世代に聞くことができているか。多くの人に関わってもらおう作り方で、魂の入ったみんなが共有できる計画にしてほしい。

ヨ 目的がはっきりしたワークショップが理想である。いろんな声が出て、次につながることもある。ワーキングチームを作って一歩踏み出さないと。達成率は100%でなくても70%でもよい。

今後のガイドライン素案づくりは、ワーキングチームを構成して作業を進める。作業班に入りたい方を募集したところ、飯室、中山、成瀬、加藤、光村、溝口委員から立候補があった。

#### 4 その他

- ・1/22 協働の指針職員研修会 終了報告

- 2/4 コミュニティすみれ、きずなの家にてぜんざいのふるまい
- 2/24 良元防災講演会開催
- 2/3 「これも協働やったんや！」協働の指針市民説明会開催